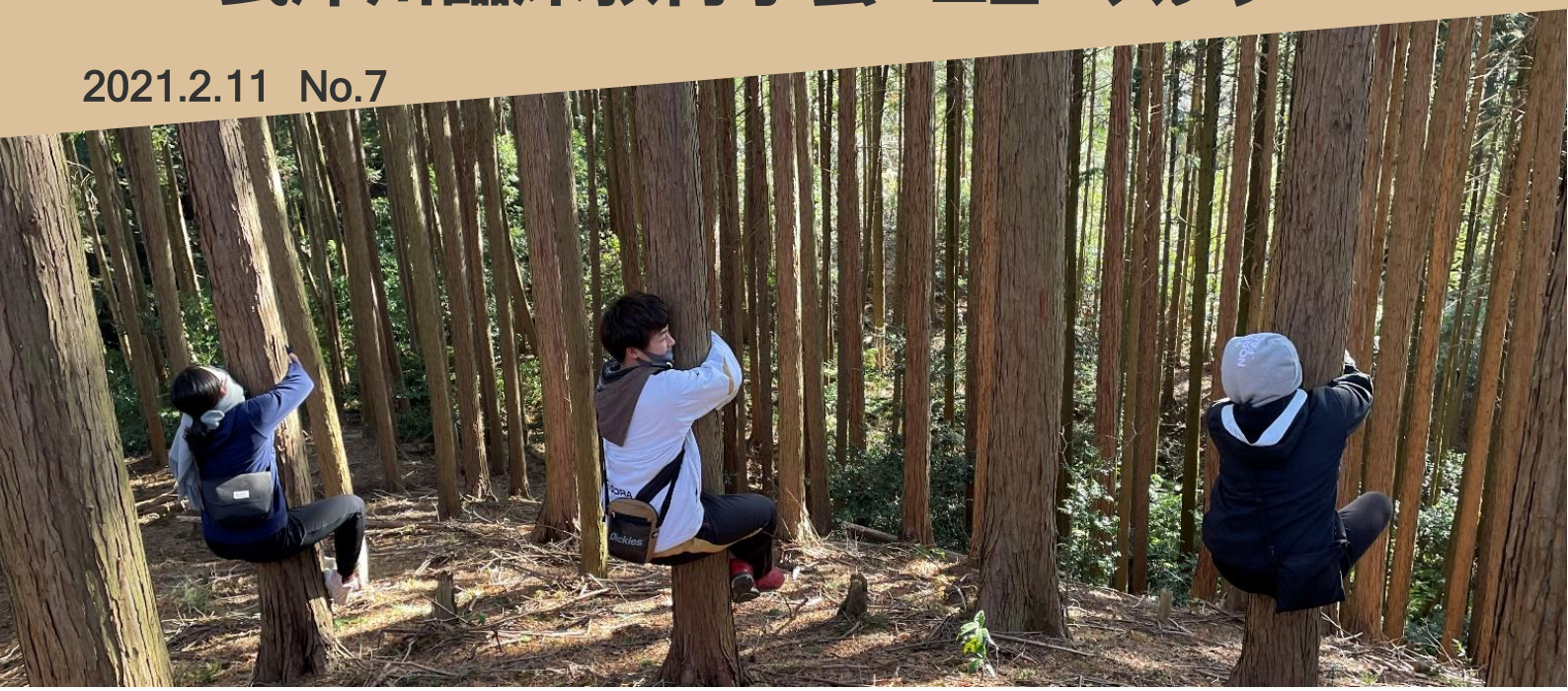
写真：1月、千早赤阪村での里山学習にて、杉のしがみつき競争をする東大阪大学 4 年生

武庫川臨床教育学会　ニュースレター

2021.2.11　No.7



第 15 回武庫川臨床教育学会研究大会が迫ってきました

今回は事前申し込みとなります。2021/2/22 までにお願いします。

● 先日、大会案内を送付いたしましたが、コロナ禍で従来と開催方法が異なります。

◆ 日時：2021 年 2 月 28 日（日）　10:00～17:00（受付　9:30～）
武庫川女子大学教育研究所 306 号室（自由研究発表は 304 号、306 号を使用）

※ 新型コロナウイルスの感染防止対策として、オンライン参加（zoom）を基本とし、会場参加も可とするハイブリッド型での開催をおこないます。なお状況によっては、オンラインのみでの開催に変更することもあります。2 月 21 日（日）にホームページで最終決定をお知らせします。

9:30	10:00	12:00	12:45	13:30	15:00	17:00
受付	自由研究発表	休憩	総会	シンポジウム（１）	シンポジウム（２）	

◆ 参加費：会員、準会員、武庫川女子大学の学生・院生は無料。 非会員は 1000 円。

◆ 内容：

シンポジウム（１）「小林先生を偲ぶ」

発言者：不登校支援の現場での活動をともにして・・・塙　守久 氏（兵庫県立神出学園校長）
武庫川女子大学の研究仲間として・・・福井　雅英 氏（滋賀県立大学）
共同研究者としての立場から・・・田中　孝彦 氏（元武庫川女子大学教授）

武庫川臨床教育学会
http://mukogawarinkyo.com/

〒663-8558
兵庫県西宮市池開町 6-46
武庫川女子大学教育研究所内

電話番号: 0798(45)9866
メール:　mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

シンポジウム（２） 「コロナ禍の“いま”を問う」

講演：「コロナ禍と教育～人間の根源的な応答性からの問い～」

菅間　正道 氏（自由の森学園高等学校・教頭・教育科学研究会副委員長）

◆ 研究大会参加の方法について

① 事前参加申し込み制といたします。2021 年 2 月 22 日（月）を〆切としますので、期日までに、「オンライン参加」か「会場参加」かを明記して、メールまたはファックスで申し込んでください。インターネット環境が整っておられる方は、できるだけオンライン参加でお願いします。

→ 申込先：メール：mukogawarinkyo@yahoo.co.jp ファックス：0798-45-9866

② 参加申込をいただいた方には、オンラインでの参加方法と発表要旨集録をお送りします。

※ご質問がありましたら、mukogawarinkyo@yahoo.co.jp 宛てにお問い合わせください。

活動報告

◆ １月の理事会・事務局会議の稟議で、今年の活動について意見交流しました。最終的には研究大会の定期総会において議論いただくこととなりますが、いくつか紹介します。

３つの研究会の中で、援助者養成グループは、様々な援助職養成の現場での課題や学生の実態、養成カリキュラムの問題点等々、日ごろ抱えている問題を出し合い、援助職養成のあり方を考え合う。定例研究会については、最低年間 3 回~4 回の実施を目指すことが検討されています。

人間の発達・成長・回復とナラティブグループは　読書会を予定しています。「原書で読むナラティブ」と題し、カナダの J.クランディニン先生の "Narrative　Inquiry" の講読に挑戦したいと思います。

編集委員会からは、『臨床教育論集』第 13 号の特集１として「対人援助職をめぐる学外実習の現状と課題（仮題）」が提起されています。今後活発な研究活動の推進が期待されます。

他の研究グループの活動計画については、次回のニュースレターで紹介します。

◆ 12 月に『臨床教育論集第 12 号』とニュースレターを配布しました。その後、未納であった 10 人の会員から会費が納入されました（2021/1/9 現在）。ありがとうございました。引き続き会費納入にご協力をお願いいたします。ただ長期の会費未納入の方に関しては、規約にてらして理事会で慎重に審議し、除籍とさせていただきます。ご理解をお願いします。

※ 2020 年 12 月 19 日、武庫川女子大学で臨床教育研究懇談会が開催され、岩崎久志会員の講演がありました。参加された会員の感想を次頁で紹介します。貴重なご意見ありがとうございました。

編集後記

コロナ禍がおさまらず首都圏に続いて関西においても 2 回目の緊急事態宣言が発令されました。

「自己責任」を押し付ける見通しのない国の方針に対して、ケア労働といわれる対人援助職の現場は深刻な事態が続いています。こうした中で懸命に生きている人たちの思いを第 15 回研究大会の中で語りあいたいと考えています。いつもと参加形態が異なりますが、みなさんの参加をお待ちしています。

ニュースレター第７号に寄稿された会員からの論稿は、一つの論議の窓口になる、力の入ったものです。編集の都合上、いくつかの原稿は次回に掲載いたしますが、ご容赦ください。

お忙しい中、投稿いただき、ありがとうございました。〈文責：吉益〉

シリーズ：私と臨床教育学⑤

臨床教育学との出会い

春木　美治

2020 年の長いコロナの年が過ぎ，2021 年更に脅威に晒される日々が続いている。今までの日常が壊れはじめ，教育現場が危機を孕み，諸問題が深刻化する恐れを感じる。

「臨床教育学は，これまでの学問の境界を破り，すぐれて学際的な方法をとることになってくる。いろいろな分野の研究者が協力し合うが，その中心に教育の具体的問題を据え…」

「臨床教育学においてもっとも大切なことは，研究者が研究しょうとする現象に自らかかわっており『客観的観察者』の立場を取らないことから出発することである…」

「…個を大切にする方法をとるのが臨床教育学の特徴である」（以上、河合隼雄『臨床教育学入門』）

さて，私にとっての大学院での臨床教育学の学びについて考えてみたい。まずは教師としての資質を育んでくれた教員養成大学での学びは，大部分が専門教科である数学に関する講義であった。一般教養以外は青年心理学，教育心理学の講義があった。1 回生の集合論，解析概論から代数学，幾何学，記号論理学。3，4 回生では原書で論文や書籍を読み，学ぶ。当時はフランスの数学者集団ブルバキの著作を読むため第 2 外国語はフランス語を履修した。記号論理学は当時コンピューターのプログラミングに繋がる講義であった。1969 年専攻科に進学し，位相幾何学 topology の学びを続けた。1970 年中学校教員となり多くの生徒と出会い多難ではあるが充実した教員生活を送る。当時数学の現代化が叫ばれ，集合論を基にした学習が設定された。これら教育内容の変遷や子育てをしながらの教員生活，また巡り合った多くの生徒達，他の教員との出会いと葛藤など，機会があれば書いてみたいと思う。

2004 年，学年主任をしながら武庫川女子大学大学院を受験した。動機は，あと数年で現役が終わる時に，「このままでは終われない」という内なる衝動にかられ，入学を決意した。臨床教育学とは何かすら理解せず，先ずは学びたいと大学院に入った。

修論のテーマは，「公立中学校におけるストレスマネジメント教育の必要性と臨床教育学的援助に関する研究」で，2001～2005 年に担任，学年主任，養護教諭，スクールカウンセラーと連携しストレスマネジメント学習のカリキュラムを作成，実施，調査結果等の分析をしたことを基に纏めた。学校現場に内包するであろう教育病理の予防又は解決に向けて，教育，看護学，心理学からの援助，協力したアプローチである。思春期真っ只中の中学生が自己コントロールの方法を知ることは，対人関係の構築に有益であり，自分や相手を知る為の見方・考え方を獲得する手立てとなり，自己の世界を広げる契機となるであろう。人格形成期にこの授業に出会うことは，たった 1 度だけの 6 時間の授業なので大きな効果が見られないかもしれないが，生徒にとって無益ではないだろう。必要なら更に時間を取り実施するのも可能である。

武庫川女子大学の新堀教授の著書「心の教育」に教育病理はいじめや不登校だけではなく暴力，飛行，器物破損，授業妨害，学級崩壊，自閉，心身症，落ちこぼれ，不本意就学なども各種の逸脱，不適応はすべて教育病理であり，学校の改善には家庭・地域社会の改善が必要である」とあるが武庫川女子大学では教育学，心理学，福祉学を軸に学習・研究がなされている。これらの教育病理は私の教員生活の中で出会った出来事そのものである。また臨床教育学の枠組みを基に前記教育病理を治癒する方向に向かって再整理をしてみたい。

時代が変わっても，教育の根幹は変わらず。人として育てることは信念と愛情があってできる事，我が子を育てることを原点に子どもを人として育てきること。中学生の今だけを見るのではなく，年を経て育っていく存在

であり，社会，地球環境の変化の中でも変わることの無い人間集団を作り上げてほしい。自分を大切に，相手を大切に生きて欲しい。最後に

“死ぬな　ケガすな　病気すな”

―勤務した中学校の前庭にある石碑に記された，我が子を亡くした親の思いー

何があっても死なないでと伝えたい。

会員投稿

社会人大学生にとっての「学び直し」の意味

～岩崎久志さんの講演を聞いて～

岡本　里香

10 月に再開された自主ゼミで読み始めた『学び直しの現象学』の著者である、岩崎久志さんの講演会が行われると聞き、ワクワクしていた。自分が大学院に通っていた 2 年前を思い出しながら、読み進めていた。

岩崎さんは、大学院で学び直した社会人を対象に聞き取りを行い、その「語り」を現象学的視点から分析し、学び直すことの実存的意義を明らかにするというテーマを持っておられる。聞き取りをし、その語りを分析する。その視点は「現象学的視点」である。本を読んでいて、その「現象学」を理解するというところで、私は躓いてしまった。それで、講演を聞けば理解できるのではないかと思い、当日を迎えた。

講演は、修士課程 1 年に在学中の院生向けに、修士論文に取り組むにあたり、質的研究の意義、量的研究とのパラダイムの違い、現象学的な視点などの内容であった。講演の最中はよく理解できていたつもりでいたが、終わってみるとよくわからなくなっていた。

終わった後、大学院の同期の A さんとお茶を飲みながら「現象学って理解できへんねん。話を聞いているときはわかったつもりでいてんけど」と聞くと、現象学について学んでいる A さんは、丁寧に自分の学んでいることを話してくれた。

小学校の栄養教諭である私は、もっと学びたい、学ぶなら臨床教育学だという強い気持ちを持って大学院で学んだが、岩崎さんの講演を聞き、そもそも私の学びは「学び直し」だったのだろうかと考えた。私も質的研究で修士論文に取り組んだが、よくわからずに書いていたようにも思えてきた。量的研究では現れない、ひとりひとりの子どもたちのつぶやき、心の叫びを、質的研究なら表現することができると思い、取り組んだ。自分も 2 年間よく頑張ったなと振り返ると同時に、卒業しても共に学び意見しあえる A さんや同期のみんな、たくさんの先輩後輩に出会えたこと、学び続ける愉しみ、それこそ私が大学院で学んだ宝物だということを確信した。

3 月で定年を迎えるが、もう少し子どもたちのそばにいたいと、今考えている。